

醫學博士齋藤茂吉君著「柿本人麿」に對する授賞審査要旨

本書は柿本人麿の全面的研究の成果にして、四冊より成る。即ち、總論篇、鴨山考補註篇、評釋篇上下、是なり。

今その概要を述べむに、まづ、總論篇は五章に分つ。第一章に於いて、人麿の傳記に關する文獻の大要を記し、次いで、柿本氏、人麿の本郷、生地就きての諸説を検討し、更に官位、日常生活、年齢、死歿の事情及び場所、妻、に關して資料を博搜し、意見を述べたり。第二章に、人麿の作品全部に亘りてこれを年代順に配列し、年代不明なるものも推定によりて系統づけ、作品と年代とを研究するに便にせり。第三章は、人麿評論史略として、古來人麿の如何なる點を如何に尊敬し評價し來れるかを史的に詳述し、現代に及べり。第四章は、前章に對して著者一家の見を述べたるものにして、多角的に歌聖人麿を評論す。次に第五章として、人麿雜纂の章を設け、人麿の肖像、人麿と同名の人々、人麿地理集、人麿歌集地理集、墓所祠廟、影供、碑文、文獻集等を載せたり。中に文獻集は、人麿に關する圖書論文等を分類列舉し、解説を附せり。その他に、附載の論文二篇を收む。

鴨山考補註篇は、主として前篇附載の鴨山考の布衍にして、人麿の死歿の場所に就きて諸説を再検討し、資料を蒐集し、實地を踏査せる結果を述べ。

評釋篇は、第一冊に人麿の作の短歌及び長歌を、第二冊に人麿歌集にありとせられたる歌を挙げ、之に、題意、語釋、大意、鑑賞を加へたるもの、諸説を集成し、且つ詳説せり。なほ第一冊には、長歌評釋の首に長歌小感を掲げ、連續的聲調の説を述べ、所謂歌格に就いて記し、第二冊には、首に人麿歌集に關して諸説を引きつつ考證解説を加へたり。

以上を本書内容の梗概とす。今之を通覽するに、この書は人麿に關するあらゆる部面に及びたるものにして、從來人麿に關する著述中、是の如く博洽なるものを見ず。その所論のうちには、直ちに従ふこと能はざるものなきにしもあらざれども、全篇に現はれたる人麿に對する熱意は、實に著者の實作者たるに基づくものにして、本書の特色も亦此に在り。されば讀者は、往々此の書に於いて主觀的色彩の強きを感じといへども、資料の蒐集整理等に採りたる方法は、全く科學的なりといふべし。

全著の根幹とすべきは、總論篇中の第四章にして、著者の人麿觀は此の章に萃められたり。人麿の作歌態度を以て全力的なりとし、また長歌に於ける價值を重んじたる等、概ね妥當の見と認むべきなり。

著者の博引旁搜はあらゆる方面にわたり、例へば總論篇に於ける文獻集のごときは、近年の雜誌の論文にまで及びり。たゞ江戸時代及びその以前の資料は、やゝ不足せる感なきにしもあらざれども、現今に於いて最も完全に近きものなりとす。また註釋篇に於いて、著者が舊來の諸説を懇切に擧げた

るは、後來の論者に便益を與ふること大なりといひつべし。しかも著者は、あくまでも實作者としての立場より之を論じ、例へば聲調技法等の點に關して問題を提起すること多く、作品研究の方法論に於いて、その根本に觸るゝものといふべし。

之を要するに、本書は、一個の學術的組織、學術的體系を示すにはあらずして、渾然たらざるものあることは、著者みづからも其の序文に於いて記せる所なり。しかもその資料の蒐集に於いて、作品の批判に於いて、著者の努力と考察との尋常ならざるは、十分に之を認むべきものなり。